

# 保育現場における領域「表現」の保育実践

— お話の絵を描く『おしゃれなカラス』—

## Childcare Practice of the Field “Expression” at the Nursery School - Drawing Activity of The Story “The Vain Jackdaw” -

野村 和弘

Kazuhiro NOMURA

### はじめに

筆者は、「表現（造形）の活動」の講師として保育現場に携わっているが、保育者からは「表現活動（絵画・造形）」に関して、「年度末の作品展に展示する題材はどのようなものがいいのか」「表現の成長ぶりを見せるためにはどう指導したらいいのか」などの相談を受けることが少なくない。これは保育参観などの行事の中で、子どもたちの表現活動の成長を保護者に伝えようとする保育者の姿勢によるものなのだが、行事に合わせた保育展開に苦勞していることを物語るものともいえる。「保護者の理想とする成果への要求」と、「それを意識して指導しようとする保育者の姿勢」が、「保護者に見せるための表現活動」の支援・指導傾向を招きがちとなり、子ども本来の「感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して、豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにする」という子どもの主体性を生かす表現活動の展開を遠ざける実情があることも否めない。

平成29年に告示された「幼稚園教育要領」「保育所保育指針」「幼保連携型認定子ども園教育・保育要領」の改訂により、幼児教育の内容や質が整えられたことで、幼児教育とは

何かを考え保育のあり方を見直すことが保育者には改めて大切なこととなった。領域「表現」においても、幼児の豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにするために、保育者はどのように環境を整え、どのような教材を与え、どう指導していくのかを、常に心に留めることがより一層求められることとなる。

本稿は、筆者が指導に関わっている幼児教育施設での「絵画指導—お話の絵を描く—」という表現活動の保育実践例を分析し、幼児教育・保育の5領域における「表現」の重要性と、子どもの表現（造形）活動と保育者の援助・指導のあり方について考察するものである。

### 1. 領域「表現」のねらいと内容

「幼稚園指導要領」「保育所保育指針」「幼保連携型認定子ども園教育・保育要領」の3法令では、「表現」の目標を「感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して、豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにする」としている。また、改訂に伴い設定されてた「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿（10の姿）」の（10）「豊かな感性

と表現」では、「心を動かす出来事などに触れ感性を働かせる中で、様々な素材の特徴や表現の仕方などに気付き、感じたことや考えたことを自分で表現したり、友達同士で表現する過程を楽しんだりし、表現する喜びを味わい、意欲をもつようになる」としており、保育者の援助・指導の方向性が示されている。

ここで注目すべき点は繰り返し用いられている「感じたことや考えたことを自分なりに表現する」という表現であり、子どもたちが「主体的に表現（造形活動）を楽しむこと」の重要性である。現場の保育者たちは「子どもたちに絵画の指導をして、理想的な結果を出さなければならない」と思い込みがちであるが、法令には「絵画の指導をしっかりと行う」などの表現は記されていない。どの題材、どの技法を取り上げたとしても、「感じたことや考えたことを自分なりに表現する」という目標に深く結びついた活動を楽しむことが重要なのである。

領域「表現」の目標について、子どもの生活する姿から捉えたものを「ねらい」とし、法令では次のように示している。

#### 【ねらい】

- (1) いろいろなものの美しさなどに対する豊かな感性を持つ。
- (2) 感じたことや考えたことを自分なりに表現して楽しむ。
- (3) 生活の中でイメージを豊かにし、様々な表現を楽しむ。

これらのねらいを達成するために、「音楽」「造形」「運動」を通して指導を行うことが「内容」に示されている。

#### 【内容】

- (1) 生活の中で様々な音、形、手触り、動き

などに気付いたり、感じたりするなどして楽しむ。

- (2) 生活の中で美しいものや心を動かす出来事に触れ、イメージを豊かにする。
- (3) 様々な出来事の中で、感動したことを伝え合う楽しさを味わう。
- (4) 感じたこと、考えたことなどを音や動きなどで表現したり、自由にかいたり、つくったりなどする。
- (5) いろいろな素材に親しみ、工夫して遊ぶ。
- (6) 音楽に親しみ、歌を歌ったり、簡単なリズム楽器を使ったりなどする楽しさを味わう。
- (7) かいたり、つくったりすることを楽しみ、遊びに使ったり、飾ったりなどする。
- (8) 自分のイメージを動きや言葉などで表現したり、演じて遊んだりするなどの楽しさを味わう。

上記の「表現」の内容には、造形を含めた音楽や運動や遊びなどの活動を通して感じ取ったり、考えたりすることで、感性や表現力、創造性を育てていく経験が含まれている。これらは自然に存在するものだけでなく、その活動を楽しめる環境を保育者が整え、日常的な生活や遊びの中で生じ育まれるものといえる。保育者はこのことを十分に理解し、子どもたちの日常生活と「表現」活動を関連づけて考えることが必要となるのである。

## 2. 保育者の様々な関わり

このように「表現」領域の目標となる「感じたことや考えたことを自分なりに表現する」ことを目標に、子どもたちが生活の中でいろいろなことに気づき、工夫しながら表現活動を楽しんでいくためには、保育者はどのように関わっていくべきだろうか。

幼稚園教育要領第1章総則第1「幼稚園教

育の基本」では、教師の役割を「教師は、幼児の主体的な活動が確保されるよう幼児一人一人の行動の理解と予想に基づき、計画的に環境を構成しなければならない。この場合において、教師は、幼児と人やものとの関わりが重要であることを踏まえ、教材を工夫し、物的・空間的環境を構成しなければならない。また、幼児一人一人の活動の場面に応じて、様々な役割を果たし、その活動を豊かにしなければならない。」としている。保育者は、日々子どもとの生活や活動の中で、一人一人の育ちや思いを的確に捉え、表現活動の環境を整え、その子なりの表現を促せる教材を用意し、一人一人に表現活動を楽しませることが大切となる。では、領域「表現」で示されたねらいの達成に向けては、保育者は具体的にどのように役割を果たしていけばよいのだろうか。

以下に、筆者が携わる幼児教育施設での「絵画指導」における、「表現活動の環境を改善」「自分の表現を楽しむ教材の工夫」の実践に現れた「子どもとの反応と保育者との関わり」を分析することで、領域「表現」に示されたねらいの達成に向けての子どもの表現（造形）活動と保育者の援助・指導について考える。

### 3. 保育現場における「表現」の保育実践例

#### (1) 幼児教育施設の現状

筆者は、平成25年より名古屋市にあるA幼稚園で「表現（造形）」活動の一環としての「絵画指導」の講師を行っており、子どもたちの造形表現活動の援助と保育者の相談役を務めている。ここでは保育者が「絵画指導」の年間計画の題材を決め、筆者は「保育者の要望を考慮した上での題材へのアドバイス」「各回の活動の導入部分の全体指導」「各クラス制作途中の声掛けや支援」を任されてい

る。筆者が講師で迎えられる以前の数年は、造形表現の専門講師は招かず、保育者たち自身が「絵画指導」の援助・指導を行っていた。そのため、筆者の着任時には「絵をどう描かせたらいいかわからない」「時間をかけて頑張ったのに思うようにいかない」「仕上げた作品がみな同じになってしまう」などの相談が多かった。また、幼稚園の「教育」という観点や年度末の「作品展に展示するための作品制作」という目的を重視するあまりに、実年齢とは別の担当園児の個々の心身の成長具合を考慮せず、「やればできると思う」という保育者の信念のもと、難度の高い課題を子どもに取り組みさせたが、保育者が理想とする出来具合に到達できずに落胆する場面もみられた。

これらの保育者の言葉からは、「子ども主体」というよりも「保育者主体」の傾向がみられ、子どもが「表現活動を楽しむ」というねらいが軽視されているように映る。普段から、保育者たち自身も子どもの内面からあふれる表現を受容し、認め、共感し、表現活動に生かそうと常に努力もしているのだが、「保護者に見せるための作品制作」という考えにとらわれ、保育者自身が身動きのとれない状況を作ってしまったともいえる。子どもが「主体的」に表現活動に参加できる「制作環境」や「教材（題材）」を設定することが、「自分なりに表現して楽しむ」ことを導き出すことの意識化が、保育者には求められてくるのである。

#### (2) 制作環境の見直し

A幼稚園では、教室の床に画用紙をつけた画板を置いて、子どもたちが向かい合わせで絵を描くというスタイルをとっている。年中組と年長組は水彩絵の具を使用する場合は、徐々に水彩絵の具の扱いが上達することを見

込んで、「自分で水彩絵の具をチューブからパレットに出して、水で溶き、画面に色をのせる」という取り組みを行わせている。

ここで、筆者が「絵画指導」に携わった当初、制作する環境として気になった点は、3～4人の子どもたちが「一つの花型のパレットと一つの筆洗」を共有していることであった。制作に夢中になり、活動的な子どもは自分の制作進度に合わせて積極的にパレットを使い、消極的な子どもは遠慮してパレットが使えなかったり、他の子どもの出した色がパレット上で混ざってしまったり、と活動を停滞させる場面が見られた。また、複数の人数で一つの筆洗で筆を洗うため水がすぐに汚れてしまい、絵の具を溶くためのきれいな水を確保することも難しくなっていた。これでは、子どもが自由に制作活動に取り組める環境が整っているとはいえない状況である。

子どもがその時に感じていることや考えていることを自由に描いたり、作ったりできる環境がなければ表現活動の意欲や楽しさを失わせる結果につながってしまう。子どもの活動を停滞させないためにも、制作環境の見直しとして、「一人に一つのパレットと一つの筆洗」を用意してもらうことを提案した。

また、「一人に一つの筆洗」の条件を整えて見たが、「水はバケツの半分くらいまで入れる」と説明しても浸透せず、極端に少ない水量の子どももいて、保育者に注意される場面が目立ったため、「全ての筆洗の内側の中央部分に油性ペンで『水位の目安』を入れる」ことを保育者に提案し、制作環境の改善を図った。

一人一人に制作環境が整ったことで、子どもは他者に遠慮することなく制作活動に集中して取り組み、保育者も注意することが減り支援しやすくなったため、滞りなく表現活動に取り組めることが可能となった。このよう

な体験を重ね、保育者側にも制作環境を整備や子どもへの指導の配慮の意識が高まり、各題材の導入部分の筆者の子どもたちへの説明時に、「今日は、この点を強調して子どもに伝えてください」などの提案も見られるようになり、保育者たち自身の援助・指導に対する積極性も高まることにつながった。これは、筆者のアドバイスを機に、幼稚園教育要領第1章総則第1「幼稚園教育の基本」に示されている「教師は、幼児の主体的な活動を確保されるように幼児一人一人の行動の理解と予測に基づき、計画的に環境を構成しなければならない」に基づき、保育者たちが教師の役割についてしっかり向き合った結果といえる。



図1 子どもたちが活動の準備をする様子

### (3) 題材の見直し

絵画表現活動を行う上で、常に保育者たちを悩ませるものとして「作品展に展示するための適切な題材は何か」という問題である。ここで使われる「適切な題材」とは、保育者が求める「保護者に子どもの表現能力の成長を見せられる題材」という意味合いが強いものであり、保育者に相談されるたびに、筆者は、「保育者の都合」が優先され、子どもが真に表現活動を楽しむことが蔑ろにされているような気がしていた。そこで、子どもたちが「主体的に表現（造形活動）を楽しむこと」

を最優先に考え、「感じたことや考えたことをその子なりに表現する」ための題材選び・活動のねらいの工夫を提案している。

### ① 「お話の絵を描く」の題材の見直し

筆者はA幼稚園では、年間を通して年長組（8題材）、年中組（8題材）、年少組（5題材）に携わっている。保育者が設定した題材に寄り添う形で「絵画指導」を行うため、既存の課題の題材や画材に改善を加えるなどして、「感じたことや考えたことを自分なりに表現する」という「子ども主体の表現活動の実現化」と「保育者の意識改革」を段階的に進めることを提案した。この学習に関わるねらいを子どもと保育者に体感させる教材の改善の一つとして選んだものは、年中組と年長組で取り入れられている「お話の絵を描く」という活動であり、今回は年中組の取り組みに焦点をあてる。

A幼稚園・年中組では、筆者が参加した当初に読み聞かせに用いられていた絵本は、佐々木マキ作の『ぶたのたね』であった。

この絵本の内容は、ブタよりも足が遅いオオカミが、ブタを食べたくて、キツネ博士から「ぶたのなる木のタネ」をもらい、木になったブタを食べようとするが、なかなか思い通りにならないという話で、ブタがなる木という奇抜さとオオカミの間抜けさが子どもを夢中にさせる理由と考えられる。

A幼稚園の子どもたちにもこの絵本は人気があったため、保育者は「お話の絵を描く」ための題材として選んでいた。事前に保育者からこの題材で「お話の絵」を描かせたいと相談があったため、筆者は「絵本の挿絵のインパクトが強いので、どの子も同じような絵になってしまう危険性がある。読み聞かせの絵本を変えた方が無難である」と伝えたが、当日までに新しい題材は見つけられず、『ぶ

たのたね』で実施することとなった。結果は、そう描くように指示したわけではないが、絵本の挿絵に引きずられ、「同じ構図（画面いっぱい描かれた大きな木にブタがなっている状態）の絵」ばかりになった。これは、「木にブタがなる」という複雑な構成に対して、どう指導していいのか悩む保育者が、どう描いていいのかわからない子どもに質問された時に、「絵本の挿絵を見て描くように促す」ことが大きく影響していると考えられる。

幼児教育・保育の現場では「表現（造形活動）」活動の一つとして、「絵本の読み聞かせ」をした上で「お話の絵を描く」という絵画表現活動を取り入れる場合がある。しかし、保育者の多くが、絵を描くことにつなげるための絵本の選定に悩んだり、子どもたちが描いた絵の出来具合に悩んだりする場合も少なくない。子どもたちが絵本の内容自体にとっても興味をもち夢中になっているからという理由で選んでも、実際に絵画活動に取り組んだ時に同じような内容表現ばかりが出てきてしまい、保育者たちが自身の支援・指導のあり方に苦慮していることが顕在化しているのである。

A幼稚園の保育者たちを観ていても、なかなか描き出せない子どもがいる場合などは、「絵本の絵を見て描いてみたら」という挿絵を真似することを勧める助言になり、「絵本の挿絵に頼る」ことが援助・指導に都合の良いものとなっているため、結果的に子どもたちの絵が同じような内容表現になってしまうことを招いてしまうのだが、「挿絵に頼る」ことから抜け出せない様子が見え始めた。子どもたちが絵本の内容から感じ取ったことや思ったことを絵に表現させたいと思っていながらも、保育者たち自身では題材の改善に踏み切れずにいたため、筆者は、イソップ物語の『おしゃれなカラス』を提案してみた。

筆者がこの物語を「お話の絵を描く」ための題材として提案した理由は、これが「絵本」ではないため、キャラクターのような固定された形態が挿絵として描かれておらず、登場人物たちの発言や行動から、子どもたちが絵を描く対象の形態や状況を自由に発想しやすくなる考えたためである。挿絵に引きずられて同じような絵ばかりが出てきてしまうのであれば、挿絵によって子どもたちの想像力を邪魔せず、対象物の形や色、様子を感じたまま、想像したまま自分なりに表現して楽しむことを、「保育実践での幼児の学習のねらい」として設定できる題材を用意すればいいのである。この要点をふまえた上で、保育者に題材の変更を提案し、幼稚園教育要領の目標を踏まえることの重要性の確認を行なった。

## ② 自分なりの『おしゃれなカラス』を描く

「お話から感じたこと想像したことを、自分なりの形や色で表現することを楽しむ」を学習のねらいとし、題材を『おしゃれなカラス』に設定した、A幼稚園の「絵画指導」（年中組（4～5歳）4クラス117名）での保育の実践例を通して、幼稚園教育要領に基づく制作環境や題材設定の重要性を考察する。

### 【活動の流れ】

A幼稚園での「絵画指導」の流れは、保育者の意向に沿いながら、以下のように進められる。

I 導入：遊戯室に学年全体が集合し、絵画指導講師の説明を聞く。

- ① 「おしゃれなカラス」の内容確認（講師）
- ② クレヨンによる描画の進め方の説明（講師）
  - ・自分が描きたいトリの形態
  - ・自分の使いたい色で装飾

- ・自分の描きたい画面構成

- ③ 水彩絵の具の使用方法的確認・色ののせ方の説明（講師）
  - ・自分の使いたい色で着彩
- ④ 要点の再確認（講師）

### II 展開：描画活動

- ① 教室に戻り、制作活動の準備をする。
  - ・園児：クレヨン、水彩絵の具、筆、パレット、筆洗バケツを用意する
  - ・保育者：画板、画用紙を設置する
- ② 制作内容と目標の確認（保育者）
- ③ クレヨンで描画（保育者・講師の援助）
- ④ 水彩絵の具による着彩（保育者・講師の援助）
- ⑤ 片付け

### 【導入】

A幼稚園の保育者が導入で講師（筆者）に求めることは、「どのように描くか、子どもたちへの説明」であるのだが、今回のような題材では子どもが夢中になって楽しめるものといえるため、「自分の好きな色を使って、自由に対象物を描く」という活動のねらいの主旨は伝えやすいものとなる。また、導入では制作活動への興味・意欲の喚起を図ることが求められるため、講師は子どもたちと題材となった『おしゃれなカラス』の内容について、言葉のやり取りをする。

### 〈講師と園児の会話の様子①〉

講師 「先生が読んでくれた『おしゃれなカラス』は、どんな話だった？」

園児 「からすがおうさまになりたくて、ほかのとりのはねをつけておしゃれするはなし」「からすはいちばんになったけど、ほかのとりたちがズルしてって行って、せめてた」……

講師 「そうだね、神様が一番きれいな鳥を『鳥の国の王様』にしてあげるって言ったから、鳥のみんながおしゃれする話だったよね。それで、カラスさんは他のきれいな鳥みたいになりたくて落ちてた他の鳥さんの羽をこっそり体につけておしゃれしたら、一番に選ばれたんだよね。でも、それはカラスの羽じゃなかったから、ズルしたって、みんなが怒っちゃったんだよね」

園児 「そう」「みんなおこっちゃった」……

講師 「カラスさんはもともと何色かな？」

園児 「くろいろ」「まっくろ」……

講師 「そうだね、カラスさんは真っ黒だね。なんで他の鳥の羽をつけたんだろうね？」

園児 「いちばんになりたかったから」「じぶんもきれいになりたかったから」……

講師 「そうなんだね。カラスさんも、本当はきれいな黒色で素敵なんだけど、他の鳥みたいにきれいな色で飾りたかったんだろうね。みんなもきれいなアクセサリーつけたり、かっこいいバッジつけたり、おしゃれしたい気持ちになるように、カラスさんもおしゃれしてみたかったんだろうね。そこで、今日は、みんなだったらカラスさんをどんな風におしゃれさせてあげるか考えて絵を描いてみようね。」

園児 「くじゃくみたいなはねにする」「ハートつける」「きれいないろをいっぱいつけてあげる」……

講師 「いいねえ。王様に選ばれるくらいきれいで、かっこいいカラスさんを描いてみようか。みんながこうだったらカラスさんが喜ぶかなって、いろいろな色や飾りの形を自由に考えて描いてみようね。カラスさんだけど、きれいに

変身したカラスさんだから、この世で一番きれいな鳥を想像して描いてもいいからね。」

講師である筆者は、子どもたちが自分なりの「おしゃれなカラス」のイメージをつかみやすいように、保育者に読んでもらった物語の内容について振り返らせる。ここでは、領域「言葉」で示される「先生や友達の言葉や話に興味や関心をもち、親しみをもって聞いたり、話したりする」という活動も体験できている。物語を聞いたという経験から、思い出したことや考えたことなどを自分の言葉で話し、講師や友だちの話す言葉を聞いて反応し、やり取りを行うことは、絵画活動のイメージ形成に大きく関与することとなる。保育者たちも子どもたちの間に座り、講師の投げかけに対して子どもたちと言葉のやり取りに参加し、子どもたちが制作への興味や意欲を高められるように支援をしていた。

#### 〈講師と園児の会話の様子②〉

講師 「では、先生だったら、カラスさんにこんなおしゃれをさせて喜ばせてあげようかなって、絵を描いてみるね。今日も教室で先生が大きい四つ切りの画用紙を用意してくれるから、主役のカラスさんを大きく描いてみようね。」

園児 「おしゃれなカラスにする」……

講師 「どんなカラスさんにするか、もう頭に浮かんでいる人は、どんどん自由に描いていっていいけど、まだどうしようか、どこから描いていこうかわからない人は、鳥の体がどうなってるか思い浮かべてみて。みんなの体は、頭、体、手、足があるよね。じゃあ、鳥の体はどうなってるかな？」

園児 「あたまとからだ」「つばさがある」

「しっぽがある」「はねがはえてる」……

講師 「そうだね、同じように頭と体があるけど、空を飛ぶつばさがあったり、しっぽがあったりするよね。他にみんなと違うところはあるかな？」

園児 「くちばしがある」「てがない」

講師 「そうそう、すごい特徴に気づけたね！くちばしはみんなにはついてないし、手の代わりにつばさがあるね。では、みんなが鳥の特徴を教えてくださいから、それをもとに、カラスさんがおしゃれになっていくところを描いていくね。」

講師 「今日も、クレヨンで描いてから、水彩絵の具をのせていきます。では、自分の好きな色を選んで描き出せばいいので、先生は『青色』で描こうかな。大きな画面だからこの辺に丸い頭を描いてみよう。〈画用紙の左上のあたりに頭部を描く〉さ、次はどこを描こうかな？」

園児 「からだ」「つばさ」……

講師 「体を描いてみたら、カラスさんの全体が描きやすそうだね。では、長細い丸の体をつけてみよう。〈頭部に体を描き加える〉頭と体ができてきたから、大きなつばさも描いてみよう。バサバサ羽ばたいてる感じにしようかな。〈つばさを描き足す〉しっぽもつけよう。〈3本の帯状の尾を描く〉あと、何が足りないかな？」

園児 「め」「くちばし」「あし」……

講師 「そうだね、じゃあ、くちばしはだいたい色で大きく描いてみよ。〈クレヨンで塗りつぶすように大き目のくちばしを描く〉目と足も描こうかね。〈黒色のクレヨンで描き加える〉だいぶ鳥らしくなってきた。みんなも鳥のどこ

から描いていいの迷ってたら、まず頭と体を描いてから、つばさやしっぽ、くちばしや目や足を描いていくと、描きやすくなると思うよ。さあ次は、今からいろいろな色を使っておしゃれにしていこうよ。何色からおしゃれにしてみようかな？」

園児 「ピンク」「みずいろ」「きいろ」……

講師 「迷っちゃうね。でも、たくさんの色を使ってカラスさんをおしゃれにあげたいから、最初はピンクで翼の先っぽを綺麗にしてあげよう。〈翼の先端部分にピンクの丸を描く〉」

園児 「きれい。」「かわいい。」……

講師 「他の色の飾りも入れてみるね。〈黄緑色、赤色、水色などの模様を加える〉あと、頭に飾りもつけてあげようかな。」

園児 「おおさまになったから、おおかんつけてみる」「くじゃくみたいにきれいなはねひろげるとこにする」……

講師 「そうだね、鳥の国の王様になったんだもんね。先生は首のところも飾っちゃおうかな。〈むらさき色で首回りを飾る〉」

園児 「どんどんおしゃれになってきた」……

講師 「おしゃれなカラスを描いて、画用紙の周りに白い部分がたくさんあったら、その部分も飾ってみるといいよ。他のお友だちのおしゃれな鳥も一緒に描いても素敵になりそうだね。木にとまってるこや飛んでるところでもいいね。〈余白部分に羽根などを描き加える〉今、先生が描いたのは、横から見たおしゃれなカラスだけけど、前から見たおしゃれなカラスを描きたい人もいと思うから、ちょっと描いてみるね。その時も、頭描いて、体描いて、つば



さ描いて、細かいところをつけていけば描きやすいかな。〈画用紙が貼ってあるホワイトボードにマーカーで描き、簡単に説明を加える〉

園児 「とんでるところにする。」「きにとまってるところにする。」「おともだちといるところにする。」「はねをひろげてるところを、まえからかいてみる。」…

「どのような順番で描いていけばいいのか、子どもたちに描き方を示して欲しい」という保育者の要望をふまえ、筆者は、画面を対象を描き入れていく順番を例として示す説明をしている。これは、描きたいイメージをもっている、画面にどう描き出せばいいのかわからない子どものために行っているもので、保育者たちも活動が停滞している子どもに対して「先生（講師）は、さっき、どこから描くと描きやすいって言っていたかな」など、講師の説明を活用することで援助しやすくなるようだ。

また、保育者たちも事前に「子どもたちに参考作品として見せる作品」を教材研究として描いたものを用意している。筆者は、導入を行う前にこれら保育者の作品を確認した上で、「本時の活動のねらい」が子どもたちにしっかり伝わるように描画の説明を行うようにしている。なぜなら、必ずしも保育者たちの作品が「ねらい」を伝えやすい作品になっているとは限らないからである。

筆者は、今回の活動のねらいを「お話からカラスの気持ちを考えて、形や色を想像して自由に表現することを楽しんで欲しい」と考え、「先生だったら、こんなおしゃれをさせてカラスさんを喜ばせてあげたい」という言葉を使い、講師自身が表現を楽しむ姿勢を示し、意欲の喚起と目標の提示を行っている。



図2 保育者たちが用意した参考作品



図3 描画の進め方の説明の様子

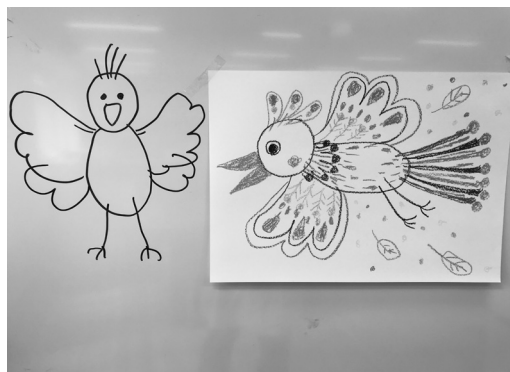


図4 横からと前からの捉え方の例の説明

保育者たちが表現した「おしゃれなカラス」よりも、多くの色を使い、装飾性を高め、動きのある様子を表現してみせることにより、子どもたちが筆者との言葉のやり取りや筆者の表現に感化され、イメージを膨らませ、自分なりに表現して楽しむことを促せるように

努めた。

### 〈講師と園児の会話の様子③〉

講師 「はい、クレヨンでおしゃれなカラスがかけたら、いつものように先生（保育者）に、もう絵の具ぬっていいですか、って聞いてから、絵の具で色づけしてね。」

園児 「は～い」「わかった～」……

講師 「では、今日も、絵の具の使い方を確認します。お花型のパレットの真ん中じゃないところに、カラスさんをおしゃれにしてあげる自分の好きな色を出します。先生は黄色のつばさを羽ばたかせてあげたいから、黄色を選んでみるね。いつものように最初は、みんなの爪くらいのおおきさ三つ分くらいの絵の具の粒をチューブから出します。〈黄色の絵の具を3粒出して見せる〉次に、お水で絵の具を溶くけど、覚えてるかな？」

園児 「きれいなおみずをちょんちょんする」

講師 「そう、筆洗いのきれいなバケツから、きれいなお水を筆でもってきて、パレットの縁でちょんちょんして、お水が溜まったら、優しくて筆でと組んだよね。では、先生もやってみるね。筆にお水を含ませてパレットの縁でちょんちょん、これを後4回くらいしてお水を溜めます。〈筆洗につけ水を含ませた筆を、パレットの縁で2回擦り、絵の具の周りに水を溜める行為を、4回見せる〉ではいねいに溶きます。絵の具のかたまりが残ってないかよく確認してくださいね。」

園児 「わかってる。」「しってる。」……

講師 「はい、では、みんなはどこから塗り出してもいいけど、先生は大きなつば

さから塗っていきうかな。ていねいに塗って、カラスさんがだんだんおしゃれになっていくのを楽しもうかな。〈つばさに絵の具をのせていく〉次は、頭も黄色にしてあげよう。しっぽも黄色で、クレヨンの上から塗ってもはじいてくれるから、塗ろう。〈頭と尾に絵の具をのせる〉」

園児 「かわいくなってきた。」……

講師 「次に、体は違う色で塗ろうかな。黄緑色にしてみよう。さて、絵の具の色を変える時は、どんなことに注意するんだったかな？」

園児 「ふでをよくあらう。」「パレットはえのぐをとりどうしにしない。」「きれいなおみずはとっておく。」……

講師 「そうだね、色を変えるから筆を洗うんだよね。その時に筆洗いバケツの三つの部屋は、『絵の具を溶くためのきれいな水をとっておく部屋』『筆をよく洗う部屋』『筆をすすぐ部屋』だったよね。じゃあ、

先生も、黄緑色に変えたいから、黄色を使った筆を洗いまーす。〈筆洗で洗うところを見せる〉はい、だいたいきれいになったら、もう一つの部屋ですすぎます。〈これですっきりきれいになったので、次の色に移れます。〈すすいだ筆を見せて確認させる〉」

園児 「きれいになった。」……

講師 「次にパレットに黄緑色の絵の具を出すんだけど、どうするんだったか覚えてる？」

園児 「おぼえてる。」「パレットをひとつあけてえのぐをだすんだよ。」……

講師 「そう、最初に出した絵の具のすぐ隣のところに次の絵の具を出すと、混じっちゃうかもしれないから、一つ間

をおくんだよね。では、先生も一つ空けたところに出します。〈黄緑色の絵の具を3粒出して見せる〉そして、バケツから『きれいなお水』をもってきて絵の具を溶きます。しっかり溶けたので、体を黄緑色にぬっていきます。まわりの羽根も黄緑色でぬっておこう。〈体部と周囲の装飾部分を彩色する〉大変身、どうかなあ〜。]

園児 「おしゃれになった。」「うれしそうにそらとんでるかんじがする。」……

講師 「はい、では、お背中ピンとして、おさらいしておきますね。今日はお話の中に出てきたカラスさんがどんなおしゃれな姿になったのか想像して描いてみます。自分が考える飾りや模様をいろいろな色を使って、鳥の国で一番おしゃれなカラスさんにしてあげましょう。教室に帰ってみんなが素敵なカラスさんを描いて楽しんでるところを見られるのを楽しみにしています。」

園児 「はーい」…… 〈遊戯室を出て、各教室に戻り、活動の準備にとりかかる〉



図5 講師が表現活動を楽しんで見せた作品

今回の活動では、保育者からの水彩絵の具を2、3色使用して仕上げさせたいという要望があるため、絵の具の扱い方、色を変える時の注意点などを、ていねいに子どもに見せ

ている。子どもたちの普段の行為を見ていると、絵の具を溶く場合に、水を含ませた筆ですぐに絵の具を溶き出すのだが、水分が足りないため、その絵の具のついた筆で再度水を足そうと筆洗の水につけるときに、水を含ませる行為ではなく、筆を洗う行為になってしまい、パレットの絵の具を減っていく点が気になっていた。これを防ぐために、絵の具を溶く場合は、「水を含ませた筆をパレットの縁で擦ることを5回繰り返し、水を溜めてから、絵の具を溶く」ことを徐々に習得できるように気を配っている。また、絵の具の色を変えるときに、パレットの区切られた隣り合わせたスペースを使い色が混じり濁らせてしまうことや、三つの部屋に別れている筆洗の水の正しい使い方を忘れがちであるため、気をつけさせるために、水彩絵の具を使用する場合は、常に確認させている。これにより、子どもたちは絵画指導の回を追うごとに、自分で考えたり、判断することができるようになっており、重要な援助となるのである。

#### 【展開】

各教室に戻った子どもたちは、絵画活動を始める準備をする。保育者から配られた各自の名前が記載されている四つ切りの画用紙を画板にセットし、お道具箱からクレヨン、水彩絵の具、筆を出し、廊下からパレット、筆ふき雑巾を取り、筆洗に水を入れに行く。各クラス、全員がそろったところで、保育者が「『おしゃれなカラス』の内容」、「活動の進め方」と「本時の活動のねらい」を確認した上で、描画活動が始まる。筆者は、廊下から各クラスの状況を眺めながら、ある程度の活動が進み出したところで、進みの早いクラスから教室に入り、声掛けをしながら子どもたちの援助・指導を行う。



図6 描画活動・保育者の援助

「図6」の活動の様子からは、子どもたち自身が「本時の活動のねらい」をしっかり受け止め、『おしゃれなカラス』のお話から自分の感じたことや思ったことから様々な想像を発展させて、自由に制作活動を進めていることがわかる。その中で、子どもが自分の表現について意見を求めてきた場合などは、保育者が子どもの戸惑いを受け止め、活動の停滞を克服できるように声かけや援助をし、本人の考えに自信を持たせることが、次の活動で見せる成長につなげられるのである。

#### 〈子どもの表現活動と保育者の援助の分析〉

自分なりの感性で、「おしゃれなカラス」を表現して楽しむ子どもたちの活動を分析する。

「図7」の活動の様子からは、子どもたちがそれぞれの考えで画面構成を行なっていることがうかがえる。どう描いていいのかわからない子どもが多い場合は、保育者の用意した見本に引きずられることが多いのだが、今回は、全ての保育者が同じ構図の参考作品を用意したにもかかわらず、自分なりの考えで描画活動を進めている点からは、子どもたちが自身で考え絵に表現することを楽しむ成長



図7 子どもたちの描画活動の様子

が見て取れるのである。

①青色を基調に、前向きでつばさを大きく広げた姿を画面に入れた男児は、「おしゃれになって、じまんしてるところをかいてるの」と話してくれて、カラスが鳥の王様になった気持ちを表現しようとする男児の考えが、作品にダイナミックに表現されている。

②画用紙を縦向きに使い、黒いカラスが少しずつ色をまとっていきの様子を描こうとしている男児は、黒色でカラスを力強く描いた上で、お話にならって、いろいろな色の羽飾りを描き加えている。男児なりにお話の内容を忠実に絵に表現しようとする姿勢がうかがえる。

③向かい合わせに座った男児と女児はそれぞれ「3匹の構成」と「2匹の構成」で、おしゃれを競うトリたちの様子を描いている。お互いの表現について楽しく会話しながら、飾りの入れ方、表情の入れ方、背景の入れ方にそれぞれの工夫をこらして活動を楽しんでいることがわかる。

「図8」からは、女児同士がおしゃべりしながら描画活動を楽しんでいる。仲のいい女児には「同じ絵を描きたい」という傾向がよく見られるのだが、この二人には模倣し合いたいという雰囲気は薄く、お互いの色使いや飾り具合を認め合いながら、自分の感性を画



図8 子どもたちの描画活動の様子

面に表現しようとする意欲が感じられる。これは領域「人間関係」の内容（7）「友達のよさに気づき、一緒に活動する楽しさを味わう」や（8）「友達と楽しく活動する中で、共通の目的を見だし、工夫したり、協力したりなどする」といった内容も含まれ、子どもの成長を促すことにもつながっている。



図9 子どもの描画活動の様子

「図9」の子どもが描いた「おしゃれなカラス」は、鳥の国の王様になったカラスの喜びが画面いっぱい表現された作品になっている。「おうさまになったから、かんむりをつけて、おおきいほうせきのくびかざりもつけたの」と、自分の表現を誇らしげに説明してくれた。目の中をカラフルに塗り分けたところなどもとても独創的であり、「鳥の王様」としての自分のイメージを豊かに表現するこ

とができるように成長した証といえる。



図10 水彩絵の具による着彩活動・保育者の援助

クレヨンでの描画活動が完了した子どもから、各クラスの保育者に着彩の作業に移っていいのかを尋ね、保育者が確認した上で「水彩絵の具の着彩活動」に入っていく。保育者は画面に大きな余白がある場合や、クレヨンによる詰めが甘い部分がある場合は、追求することを助言している。「図10」からは、筆に溶いた絵の具を含ませすぎて、画用紙上ではみ出してしまったことが気になり、保育者に困っていることを相談する男児に、対応する保育者の姿が見られる。保育者がアクシデントに対しての対応をしっかり援助を通して見せることで、次の活動で生かされるであろう子どもの自立が期待できることとなる。

「図11」の様子からは、水色とピンク色の絵の具を使って着彩しているのだが、絵の具を溶くときに2色の間を空けてパレットを使用している。隣り合わせたパレットの部屋で絵の具を溶いてしまうと、絵の具が混じり合って濁らせてしまうこともあるのだが、この女児は、筆者や保育者からの使い方の説明をしっかり理解し、習得することができるよ



図11 水彩絵の具による着彩活動の様子

うになっている。年中組の新年度5月から、自分で水彩絵の具を取り扱うことが始まり、半年が経過し、これまでに5回の経験を経ているため、回を重ねるごとに扱いが上手になっている。混じっていないきれいな色で作品づくりをしようとする意識がしっかり着彩活動に反映されており、工夫して活動を楽しむことができている。一方、パレットの使い方を間違い、隣同士の部屋に絵の具を出してしまう子どももあり、不安げに筆者や保育者に相談する場面もあるため、次から気をつけることや、混じってしまわないように気をつけて筆を使えば問題ないことを伝えることで、保育者は子どもの不安や停滞を克服させていた。

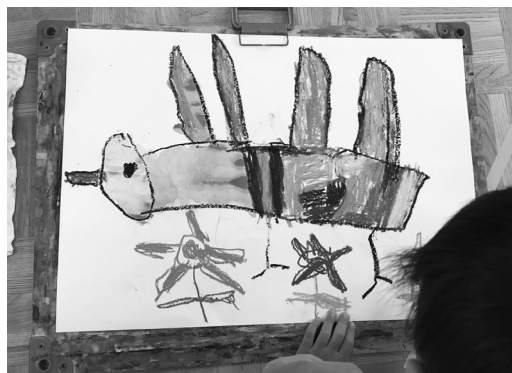


図12 男児が描いた「おしゃれなカラス」

「図12」の子どもの作品は、筆者や保育者

の参考作品に引きずられることなく、自分の考えでカラスの形態を描き、自分の感覚で着彩しており、集中して自分のイメージの表現を楽しむことができた様子が印象的なものである。保育者もその子の意欲や作品の特徴を生かすことを優先し、温かい言葉を掛けながら見守っていた。これは「幼児の自己表現は素朴な形で行われることが多いので、教師はそのような表現を受容し、幼児自身の表現しようとする意欲を受け止めて、幼児が生活の中で幼児らしい様々な表現を楽しむことができるようにすること」という領域「表現」の3「内容の取扱い」に留意すべきこととして示されていることを、保育者たちがしっかり理解し、指導する側の意図を押し付けることなく援助していることが生かされているといえる。



図13 女児が描いた「おしゃれなカラスたち」

「図13」の作品は、おしゃれに着飾ったカラスの元に、他のおしゃれをしたトリが遊びに来たところを、女児が描いたものである。他の子どもたちが水彩絵の具で着彩する段階で、カラスの地の色を様々な色で変身させている中、この女児は「黒いカラス」がおしゃれになったところを描こうとして、黒色に近い紺色で頭とつばさを着彩している。これはお話の内容に忠実であろうとするこの女児が、自分なりの考えで「おしゃれなカラス」

を創造した結果といえる。正面から見たトリと横から見たトリを構成することで、きれいになったカラスをお祝いに来た様子が、ほのぼのとした雰囲気で描かれている。



図14 女兒の描いた「おしゃれなカラス」

「図14」の作品は、「図8」の女兒が友だちと楽しく会話しながら描いたものであるが、「鳥の国の王様」を意識して、つばさを広げた自分のイメージを画面いっぱいに表現している。クレヨンによる描画時にも、きれいなアクセサリを飾るようにいろいろな色で模様を描き、表情も王様になった嬉しさを表現したと述べている。着彩も一番目立つ色ということで、黄色を選んでいいる。『おしゃれなカラス』のお話の内容から、女兒が想像を発展させ、自分なりに表現を楽しんでいることがよくわかる作品である。

#### 〈まとめ〉

今回の活動では、『おしゃれなカラス』という『イソップ物語』の中の一つを保育者から読み聞かせしてもらい、そのお話の様子や主人公の気持ちなどを自分なりに解釈し、感じ取ったことや考えたことを友だちや保育者に伝え合ったり、イメージを膨らせたりすることで、それぞれの子どもたちが絵画表現を心から楽しむことができていた。また、画材の使い方思い通りにならないことが発生し

た時も、その子なりにやり方を工夫したり、保育者や講師に助言を求め、より良い使い方ができるように努力したり、子どもたち自身が見通しをもって活動をやり遂げようとする様子が見られた。これは領域「表現」に謳われている「感じたことや考えたことを自分なりに楽しむ」というねらいを、子どもたち自身がしっかりつかみ、取り組んだ結果といえる。子どもたちの中には、自分のイメージを上手く形に表現できなかつたり、道具が適切に使えなかつたりする者もいるのだが、友だちの様子や保育者からの援助により、その子なりに自分で解決しようとする姿勢もうかがえた。

この成長は、子どもたちが「自分なりに表現活動を楽しむ」「水彩絵の具の使い方に慣れる」という今回の活動のねらいをしっかり捉えて活動できるように、保育者たちが制作環境設定や教材研究にしていねいに向き合ったことが促したものと見える。子どもたちに自分なりの表現することの楽しさを味わわせるために、保育者たちは講師からの助言をもとに、子ども一人一人の気持ちを支えることや掘り下げた活動を促すための援助・指導を目指し、子どもたちと共に日々、保育者自身も成長しているとも見える。

#### おわりに

本稿では、筆者が「絵画指導」の講師として携わった保育現場での描画活動の様子を分析することで、領域「表現」を通して子どもたちが何をどのように体験し、学ぶことでどう成長したのかを示してきた。子どもを成長させることのできる真の保育実践には、「幼稚園教育要領」「保育所保育指針」「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」に基づく保育者の教育指針と想いを見て取ることができ

今回取り上げた活動では、「保育者が読み聞かせをした物語に興味をもち、想像する楽しさを味わった上で、感じたことや考えたことを自分なりに絵に表現する」というめあてを子どもたちがしっかり理解し、「自分なりの色や形を表現することを楽しむ」活動を一人一人が興味をもって取り組むことが大切となる。この一連の活動の流れの中で子どもの学びは、経験を積んだ保育者にとっては子どもの成長具合に合わせて計画的かつ柔軟な対応により可能となるのであるが、新任の保育者には予期せぬ子どもの行動に援助や指導が追いつかず難しい場面もある。しかし、子どもたちが興味をもって取り組み、夢中になって描画活動を楽しむ姿や、子どもの感動や思いが詰め込まれた作品に接することで、より良い制作環境のあり方や教材のあり方を保育者自身が考え成長できる契機ともなり、保育者育成の観点からも領域「表現」の取り組みは重要なものといえるのである。

また、今回の「お話の絵を描く」という領域「表現」の活動には、単に絵を描くというだけでなく、領域「人間関係」の内容(2)「自分で考え、自分で行動する」や領域「言葉」の内容(3)「したいこと、してほしいこと言葉で表現したり、分からないことは尋ねたりする」といった他者との関わりにより、自分の能力を育てていくという体験も多角的に含まれてくる。これは幼児教育が領域ごとに目標、ねらい、内容を定めていても、領域ごとに見方・考え方を変えているわけではないという姿勢の表れといえる。小学校教育は授業という形の中で各教科の教材が教えるべき内容を示していて、45分の授業のやり方の中で工夫

しているが、幼児教育の場合は園という環境の中で子どもが能動的・主体的に活動に関わることで試行錯誤しながら、幼児期の資質・能力を身につけていく。そのような幼児教育のプロセスを大事にすることで、幼児教育の様々な活動が成立しており、それを保育者が子どもとともに作り上げて行くのである。それが結果的に「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を実現することになる。

A幼稚園・年中組の「絵画指導-お話の絵を描く『おしゃれなカラス』-」の活動については、領域「表現」の「感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して、豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにする」という目標を、経験豊かな保育者たちが柔軟な対応で捉えた上での実践だからこそ、今回のような保育が行うことができたといえる。「表現」で何を育てるかを理解した上で、保育者が自分に置かれた環境を理解することで、さまざまな表現活動に関する保育実践が可能となる。そして、保育者養成課程の大学教員が保育者とともに、保育現場で子どもたちの成長を支える保育を実践することが、保育者を目指す学生への充実した教材提供にもつながるのである。

## 引用文献

『平成29年告知 幼稚園教育要領・保育所保育指針・幼保連携型認定子ども園教育・保育要領(原本)』

## 参考文献

『〈領域〉表現』萌文書林 2018